

北部九州日本海域の中世土器・陶磁器 - 甕・壺・鉢を中心に -

徳永 貞紹（佐賀県教育庁）

北部九州の日本海域は、関門海峡から平戸島までの響灘・玄界灘一帯と壱岐・対馬を含む朝鮮海峡までの範囲で捉えられる。大陸との西の接点という地理的特質は、人や物が東アジア規模で動いた中世にあって殊に重要な意味を持った。



本地域は、主に煮炊具の様相と在地系土器生産の状況から東半部の豊前北部・筑前と西半部の肥前北部・壱岐・対馬に二分することができる。東半部・西半部とも貿易陶磁の普及率が高いという点で一致するが、西半部は土器生産が低調で搬入品に依存するという独自性が見られる。

北部九州における中世前期～近世初期の貯蔵具（甕・壺）と調理具（捏鉢・擂鉢）

中世前期の貯蔵具は、中国陶器を主体とし、朝鮮無釉陶器、知多（常滑）窯陶器、^{かばんじょう}樺番城・龜山窯系・東播磨諸窯の須恵器系陶器などが少量ある。博多・大宰府では豊富な種類の中国陶器が多数遺されており、他地域でほとんど出土しない大型甕・壺の存在が特記される。調理具（捏鉢・擂鉢）も中国陶器が定量用いられるが、12世紀後半以降は東播磨諸窯捏鉢の搬入量が増加し、調理具の中心となる。

中世後期の貯蔵具は、備前窯陶器が急増し、中国陶器・知多窯陶器に取って替わる。調理具は、擂鉢が主体となり、備前窯擂鉢と在地系・防長系瓦質擂鉢が急増する。備前窯陶器の増加は備前Ⅳ期に顕著であり、知多窯甕・東播磨諸窯捏鉢から備前窯甕・擂鉢への転換という汎西日本的傾向と一致する。

近世初期（16世紀末～17世紀前半）には肥前陶器（唐津）・肥前磁器（伊万里）の生産開始と大量流通によって食器様式が大きく変化し、土器・陶磁器流通の上でも画期を成す。貯蔵具・調理具はいずれも急激に肥前陶器へ移行する。

中世から近世初期の日本海流通 - 北部九州と北陸との関係 -

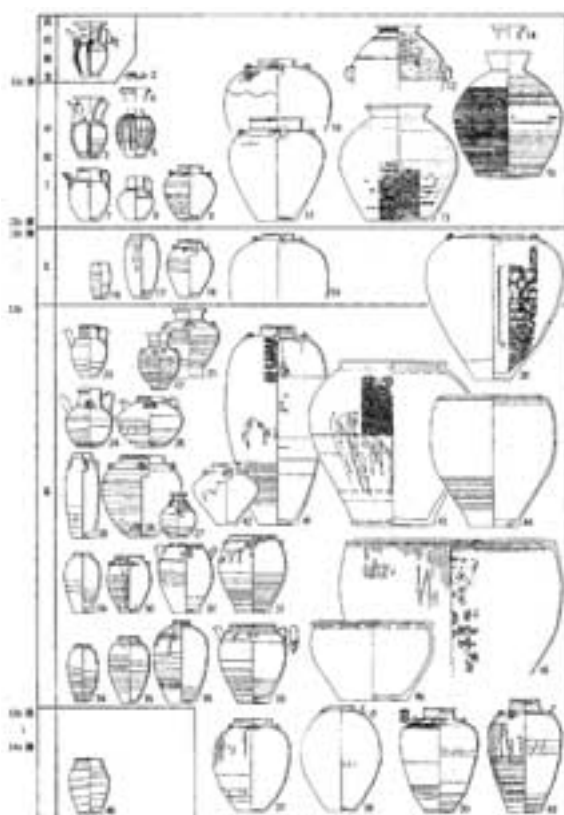
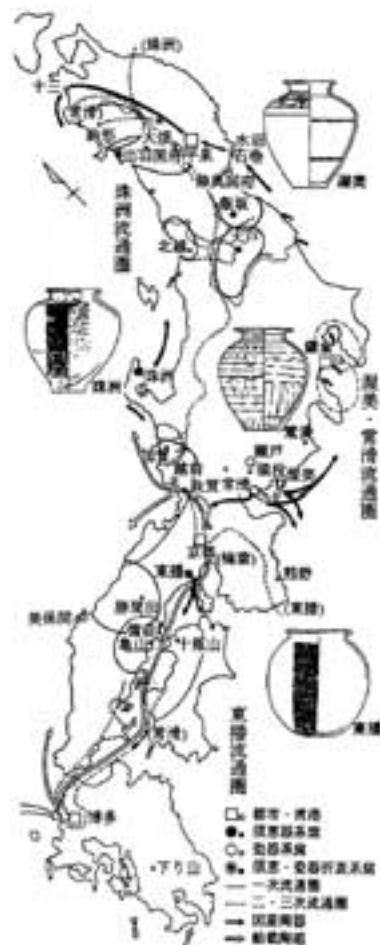
中世前期に北東日本海域に広く流通した珠洲窯の製品は、現在までの知見では北部九州に達しておらず、逆に九州地域で生産された広域流通品である滑石製石鍋は北陸地域にほとんど広がっていない。出土品としての食器に見る限り、中世前期における北部九州は、北陸との関係が希薄であり、むしろ瀬戸内海から畿内までの流通圏と太く繋がっている。

しかし、中世後期には日本海域の各地を繋ぐ広域な物資流通網・交通網が形成されたようで、14世紀後半～15世紀前半に若狭日引石製の石塔が日本海から東シナ海沿岸の主要港湾を中心に、北は十三湊から南は坊津まで広域に分布している。また、豊前小倉城跡から出土した越前窯擂鉢は、人の移動に伴うか他の物資に付随するかしてもたらされた副次的搬入品として位置づけられ、北部九州と北陸との隔地間流通を裏付けるものである。

近世初期に肥前陶器（唐津）続いて肥前磁器（伊万里）の生産が開始されると、その製品はたちまち全国的に広がり、とりわけ日本海沿岸域では安定した流通状況をみせる。このような日本海域の広域流通網は、中世後期において萌芽していたと言えるが、中世末までは北部九州との流通・交通を示す史・資料が、山陰からせいぜい若狭・越前あたりまでの範囲でしか確認できず、加賀・能登以北と北部九州との行き来は近世初期の豊臣政権による全国统一以降のことであろう。



中世から近世初期の主な港湾・都市（北部九州）



北部九州出土貿易陶磁甕・壺・鉢の編年

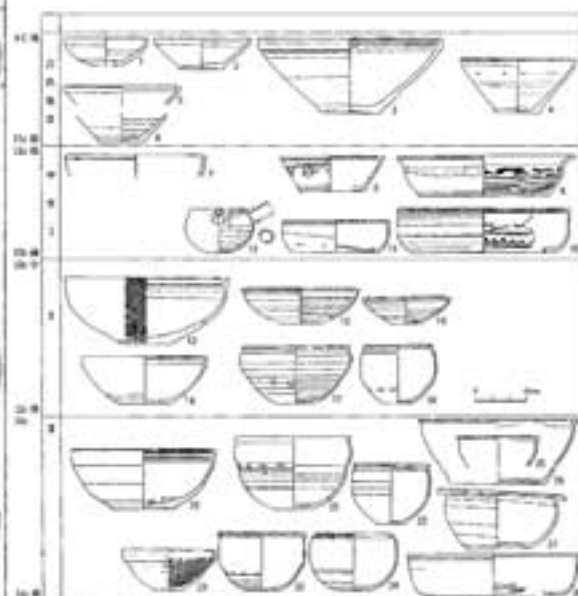
（山本信夫・山村信榮 1997「中世食器の地域性 10 九州・南西諸島」

『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集）

12世紀中葉～13世紀前半の都市と陶磁器流通圏

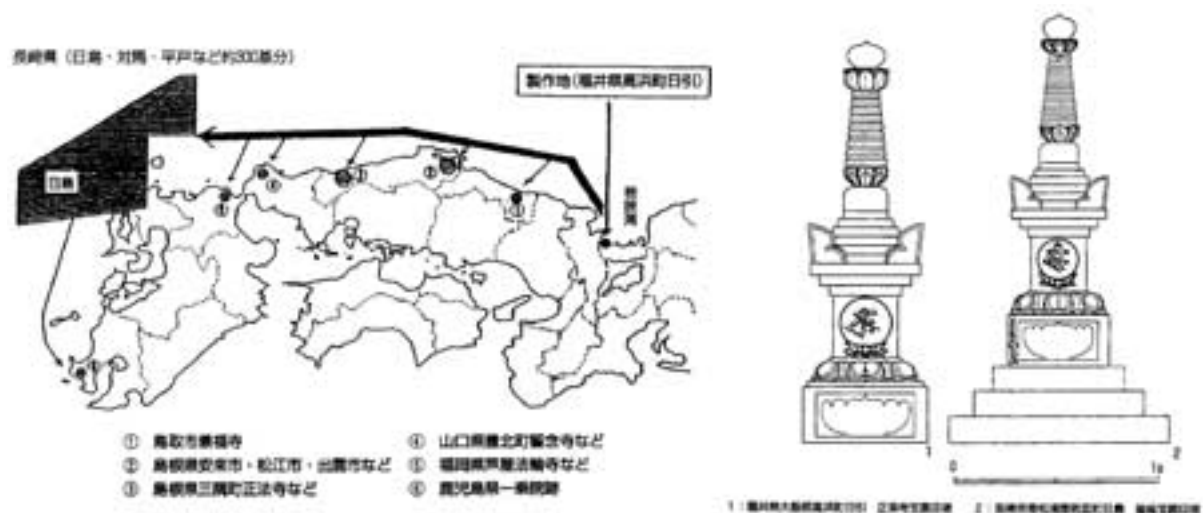
（吉岡康暢 1997「新しい交易体系の成立」

『考古学による日本歴史9 交易と交通』）

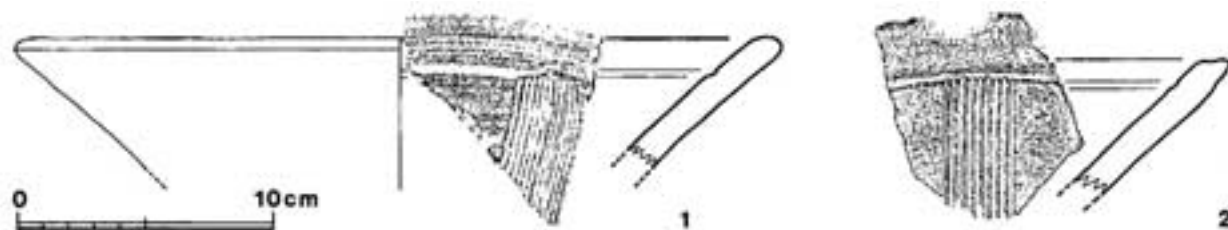




中国陶器大型甕・壺の分布
(足立拓朗 2001「中世前期の大型褐釉陶器の流通経路」『青山考古』第18号)



西日本における日引石製石塔の分布、若狭と肥前の日引石製石塔
(大石一久 2001「日引石塔に関する一考察」『日引』第1号)



小倉城跡出土の越前窯摺鉢
(北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1997『小倉城跡2』)